

### 一番伝えたかったこと

編 三部作を通して、一番伝えたかったことやテーマはありますか？

蜂谷 常々思っていることなんです。人間って生まれる環境、時代、場所、親などは選べないですよね。それが「宿命」。命に宿っているものだから変えられない。でも、自分で変えようと思つて変えられるのが「運命」。

じゃあ、その「宿命」をどう自分の「運命」として運んでいくのかというのを、いつもすごく考えています。だから、結構それぞれ重いものを背負わされた

人たちが登場するんです。そういう人を通して、自分が救われた。自分自身もそうだし、読んでくださった方が今すごく辛い状況だったり、逃れられないような状況にあつたとしても、何とかなるんじゃないかというように。私自身どの作品を書いても結局そう

なっちゃうんだけれど、それを今回は特に意識して書いたかもしれないですね。

今後書いてみたい題材

編 今後書いてみたい人物や題材などはありますか？

蜂谷 明治時代の七宝家や浮世絵師の話を書いてみたいというのがあります。

いなと思つています。でも、表現する人を書くのつて難しいんですよ。

編 どんな話になるのか非常に興味があります。

蜂谷 私は実物のモデルがいると書きづらい方なので、ちょっと調べてみたいと思つています。

編 今はそういう題材を考へられてるんですね。

蜂谷 チャレンジとして、「表現する人」を表現してみたいというのがあります。

編 最後に読者のみなさんへメッセージをお願いします。

## 「宿命」は命に宿っているものだから変えられない。でも、自分で変えようと思つて変えられるのが「運命」。

## 『落ちてぞ滾つ』、『いとど遙けし』に続く最新作『雁にあらねど』。本シリーズがついに感動のフィナーレへ。

### シリーズ第3作



江戸や京都など各地から、北の地箱館へ流れ着いた人々。数奇な運命に操られた彼らは、一本の糸に縊り合され、それぞれが新たな道へと踏み出していく。

### 雁にあらねど

蜂谷 涼

2017年8月刊  
1,700円(税別)

【後記】 今回のインタビュは蜂谷先生のご自宅で行わせていただきました。とても気さくな方で、どんな質問にも丁寧に答えてくださり、「宿命」をどう自分の「運命」として運んでいくのか、いつもすごく考えている」という言葉が心に残りました。

『落ちてぞ滾つ』『いとど遙けし』に続き、今回で完結となる第三弾『雁(かり)にあらねど』。

本作ではナギが中心となり、彼女の様々な表情にぐっと引き込まれます。歴に傷持つ人間、心に闇を抱える人間——彼らへの賛歌(オマージュ)こそが、蜂谷作品の核を成しているように思えます。

そのような蜂谷先生の作品を、是非、思う存分楽しんでください。  
(聞き手:編集部 白幡和美)

### シリーズ第1作



箱館戦争の爪痕が残る維新後の箱館。朝敵となった東雲藩士の娘は亡夫の仇を討つべく、この地へやって来た。ここ箱館には、様々な事情を抱えた人々が流れ着いていた。東雲藩の主席家老を務めた男、京都上七軒で売れっ子芸妓だった女、江戸で火消しとして名を馳せた男、それぞれが新天地を求め、激動の時代を生き抜いていく——。

### 落ちてぞ滾つ

蜂谷 涼

2013年3月刊  
1,600円(税別)

### シリーズ第2作



江戸時代前期より播磨龍野藩藩主の脇坂家に長年仕えてきた岩橋家。そのお役目とは、主君の密旨を受け、相手方の内情を探ることだった。陰謀や欲望が渦巻くなか、女隠密として家の誇りを賭けた戦に挑む母娘三代の物語。

### いとど遙けし

蜂谷 涼

2015年5月刊  
2,000円(税別)

【敗者の美学】と銘打った本シリーズが始まったのは、いまから五年ほど前のこと。『てくれっつのはば』(二〇〇六年 柏艸舎刊)を舞台化してくださった劇団文化座の全国公演が終了したところで、蜂谷先生と新作のテーマを話しているなかで生まれたものだった。

当初、本シリーズは男性を主人公にすることに悩んでいたものの、このテーマではどうしても言い訳がましくなってしまうというところで、女性を主人公にしたシリーズに変更したいと、蜂谷先生から申し出があつた。

たしかに、蜂谷先生のこれまでの作品を見ると、男性は「言い訳しない」、女性

## 人生には勝者も敗者もない 長編時代小説連作三部作!

性は、いったん決めたら真つ直ぐ、という潔い人物が数多く登場している。

シリーズ第一弾の『落ちてぞ滾つ』では、朝敵となつた東雲藩(会津藩がモデル)の娘を中心にして物語は進む。仇討ちのために箱館に

流れ着いた彼女は、同じように激動の時代に翻弄されながらも誇りや意地を貫く人々に出会い、新天地で生きていくことを決意する。

続く第二弾『いとど遙けし』では、第一作で脇役だった老婆が、実は江戸時代前期から播磨龍野藩藩主に仕えていた家の女隠密であったことが判明する。舞台を江戸から龍野、長崎、そして箱館へと移しながら、隠密として生きねばならぬ哀

しい宿命を背負つた母娘の戦いが描かれた大作である。シリーズで共通しているのは、時代の荒波に呑み込まれて、敗者となった人々がそこから光を見出し、それぞれが新たな道へと踏み出していく姿が描かれていることである。

それから、魅力的な人物がたくさん登場すること。上記のインタビュで蜂谷先生も述べられているとおり、特に女性には共感できる人物が見つかるはずだ。苦しみや悲しみを経験しない人などいない。だからこそ読者は、蜂谷先生の作品に登場する人々の痛みや葛藤を共感できるのだろう。『敗者の美学』というテーマを掲げてはいるものの、

このシリーズを通して著者蜂谷先生が一番伝えたかったことは、「人生には勝者も敗者もない」ということではないだろうか。最後に『いとど遙けし』の一篇を紹介したい。

人生に勝ち負けなど、ありはしない。 どれほど無様であろうとも、ただひたすら生き抜いていく。 命尽きるその日まで、春が来るたび萌え出つる。 それが、天から与えられた命を慈しむということではなからうか。

読み応えのある感動の三部作、ぜひご覧ください。  
(編集担当 青山万里子)